

# CAROWAA

CAROWAA ーちやろわ

アチヨリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィスの現地スタッフが名づけてくれました。

ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。



## パボサブカウンティー主催 「墓移転の儀式」

かつては6万人を超える国内避難民が暮らし、「ウガンダ北部最大のキャンプ」と言われたアムル県パボ・メインキャンプ。治安の回復とともに住民の多くは既に出身村に帰還、もしくはトランジットサイトに移動し、2009年の調査によれば人口は8,500人まで減少したとされています。

コミュニティ開発チームが担当する緊急パイロットプロジェクトにて建設する公共サービスホール、職員宿舎の予定地はもともとサブカウンティーの公共用地であるこのキャンプ地。サブカウンティーはコミュニティ開発チームの協力を得て、2009年12月までに対象地域の住民移転を完了しました。しかし長年のキャンプ生活によりつくられたお墓はアチヨリの伝統儀式に従って移転しなければならず、多くの国内避難民は経済的事情のためお墓を残したままキャンプを去りました。(ニュースレター1~2号参照)

お墓の移転は敏感な問題であり、これを解決しなければ着工できないばかりか、何よりも住民の感情を傷つけてしまうことを危惧していたコミュニティ開発チームはパボサブカウンティーと話し合いを重ね、サブカウンティーが儀式に必



左からチェアマン、伝統リーダー、サブカウンティーチーフ



参加者たち。  
家族総出で墓を掘り起こした。

要なヤギや羊を準備し、住民が墓を掘り起こす、という役割分担によって移転完了を目指すことになりました。

2月19日、第1回「墓移転の儀式」には伝統リーダー、チェアマン、サブカウンティーチーフが揃い、JICAがアチヨリ地域の伝統を尊重してプロジェクトを進めていることに敬意を表し、「JICAの素晴らしいアプローチを他の機関にも見習ってほしい。この儀式に参加することでJICAはもはや単なる開発パートナーではなく、私たちの家族となる。」と力説。参加住民も熱心に耳を傾けていました。当初は100程度と推測されていたお墓の数でしたが、2月19・24・25・26日の4日間に渡って行われた掘り起こし作業後には予想の倍以上、249ものお墓が存在していたことがわかりました。パボサブカウンティーによれば参加者は合計890名(92世帯)、JICAが放送しているラジオ番組でのアナウンスを聞いて駆けつけた住民も多かったそうです。亡くなった家族をようやく出身村に連れて帰ることができ、一様に安堵の表情を見せていました。当日の様子は新聞やテレビでも大きく取り上げられ、反響を呼んでいます。

### 密着ルポ①「発掘現場にて」

「儀式」というからには日本的に「合同慰霊祭」のようなものを想像していた。しかしそんな物々しさも厳粛さもなく、代表たちの挨拶が終わった途端、各世帯全く別行動。鍬などでそれぞれの場所を掘り始めると、徐々にこちらの想像がかなり間違っていたことに気づく...

#### 1. お墓はどこにある？

墓石や墓標があるわけでもなく、一見してわかるお墓などひとつもない。皆自分が住んでいたハットを基準に、記憶だけでひたすら掘っているのだ。子どもたちが眠る場所を正確に示す母親、一方でキャンプを離れて随分経つため、いくら掘っても何も見つけられない家族には見ている方が気の毒になってしまう。

#### 2. 棺がない！

遺体は棺に収まっているものだと思い込んでいた。しかし、掘り起こされる亡骸の多くは布でぐるまれているだけ。紛争の最中、棺を準備するお金もない上に、キャンプでは隣家との間隔が異常に狭く、棺を埋める場所もなかったのだ。

#### 3. 小さすぎる亡骸

現場で掘られるのは小さな穴ばかり。不思議に思っていたが、お墓の大多数が乳幼児のものだとわかった。死産、流産も非常に多く、この場合は布にくるまわず、壺に収めて埋葬されていた。当時の食糧事情、衛生環境が劣悪だったことが推測される。

#### 4. ヤギはどう使う？

住民が自分でお墓を移転できない最大の理由は「儀式に使うヤギを用意するお金がない。」だった。ヤギを墓の上で殺し、血を大地にしみ込ませる様子を想像していた。

突然、誰かがお墓も何もない芝生でヤギの頸動脈を切り、胃を裂き、中から消化途中の草をかき出した。あちこちから家族の代表が集まり、ビニール袋にその草を詰めて去っていく。重要なのは血ではなく、草だったのだ。



## 密着ルポ②「土に還る」

2月19日午前10時50分、最初の遺体が発掘された。3歳の男の子、3年ほど前に亡くなったという。体の一部が残っているのだろうか、おそろおそろのぞいてみると茶色に変色した布が見えた。土中からそれを取り出し、母親が大事そうに布を抱きかかえた瞬間、サラサラっと土が落ちてきた。男の子は全く土に還っていたのだ。

世帯主のオドレさん(60歳)が先ほどヤギの胃から取り出した草(アチヨリ語で「ウェ」)をひとつまみ、ふたつまみ、掘り返した場所に何か唱えながら投げ入れた。ウェには浄化作用があるそうだ。日本のお祓い、お清めのような意味合いだろうか。「紛争のせいでこんなところに埋めてしまっでごめんよ。今からちゃんとした場所に埋めなおすからね。」と孫に話しかけたと後から教えてくれた。

◆◆◆

アチヨリ地域では双子は不吉と見なされ、墓を移転する際、ヤギではなく、さらに浄化作用が強いと言

われる羊のウェを使わなければいけない。双子を流産した若い女性とその家族はウェだけでなく、羊の毛皮も持ち帰ろうとしていた。理由を尋ねると、掘り出した双子を地中で埋めなおす際、羊の毛皮を一緒に入れ、残りの毛皮を母は腰に、父は腕に巻くことで今後の健康を祈願するそうだ。

◆◆◆

2月26日午前11時20分、冷たい小雨が降り続く中、人がすっぽり入ってしまうほどの深さの穴から毛布に包まれた遺体が掘り出された。明らかに大人だ。ウガンダ政府軍の兵士だった彼は1997年、25歳で反政府軍のLRA(神の抵抗軍)に撃たれ亡くなったそうだ。10年以上経っているというのに、今回初めてこんなにしっかりとした人骨を見た。頭蓋骨がそのまま残っていて、今にも喋り出しそうだ。この家族は合計8つものお墓を掘り起こしていた。兵士以外の死因はマラリアとHIV/AIDSだという。

◆◆◆

伝統儀式を重んじるように見える彼らだが、不思議なことに、実際、お墓にそれほど執着はないようにも

見える。例えば乳幼児の墓は土に還るのが早く、掘っても何も出て来ないことがわかりきっていることから、途中で「じゃあこのあたりの土を持っていこう」と切り上げてしまう様子を見かけた。日本だったら「骨を全部集めなければ」と必死になりそうなところだが、これがアチヨリの死生観なのだろうか。皆悲壮感もなく、明るくお墓を掘っていた姿が印象的だった。

◆◆◆

掘り出した遺体はさらに布などで包み、薄っぺらの段ボールに詰める。家族はそれぞれの自転車に紐で固定し、ゆっくりと帰っていく。万が一途中で落としてしまうと、儀式をやり直さなければいけないそうだ。

胃以外に出番のないヤギと羊はあつという間に解体、調理された。鍋を囲むのは年長の男性たちだ。皆嬉しそうに肉を頬張っている。

最後まで全員別行動、マイペース。ここではこれが「儀式」なのか・・・と思うが、これで一区切りついたという気持ちは彼らの表情から読み取れる。(終)



掘り出された3歳の男の子。包まれていた布は茶色くボロボロになっていた。



死産、流産の場合はこのような壺に収められる。への緒は別の壺に入れる。



オドレさん  
孫と会話しながらウェをまいた。



ウガンダ政府軍兵士の遺骨

## 国際開発ジャーナル・中坪編集次長 3度目のグル来訪



パボ・墓発掘現場でインタビューをする  
中坪編集次長

2月15～19日、国際開発ジャーナル社の中坪編集次長が取材のためグルを訪れました。同社発行の月刊誌「国際開発ジャーナル」では2009年11月号よりウガンダ北部復興支援プログラムに関する記事を『ウガンダ通信』として連載しており、中坪さんにとってはこれが3度目のグル訪問です。

今回は総合開発チーム、コミュニティ開発チームのプロジェクト進捗状況を確認するだけでなく、円借款での実施が予定されているグルー

ニムレ間の道路改修現場視察のためスーダン国境付近や、平和構築支援無償の対象サイトのひとつであるキトゥグム県から地雷埋設箇所まで足を延ばしました。

大学での専攻は考古学だったという中坪さん、最終日に参加した墓移転の儀式は発掘調査を思い出したのか特に興味深そうに取材をしていました。

次回は5月にグルを再び訪問すること。いいネタをたくさん揃えてお待ちしております。

発行: JICAグルオフィス

所在地: 6A Samuel Doe Road, Gulu, Uganda

Phone: +256-(0)392 900158

今回はパボでのお墓移転特集号となりました。日本とはまったく違ったアチヨリ地域の伝統に驚きますが、現地スタッフに聞くと「若者にとってはかなり違和感がある儀式」とのこと。時代の波はグルにも来ているのでしょうか。